

もうひとりのおれ

かつて入院したことがある病院に
ぶらりと入った

今では懐かしい思い出となった病室の
ドアをそつとあけると
ベッドの上にもうひとりのおれがいた

窓の方に身体を向けて
横になってはいたけれど
おまえはおれにちがいない

おまえの輪郭は
窓から差し込む夕陽を浴びて
輝いていた

お前の思考が
手にとるようにわかる

おまえのからだがゆっくりと
寝返りを打ち始めたとき
おれは慌ててドアを閉めた

さよなら

今はまだとりあえず…

もうひとりのおれよ